比較の意味 Ⅱ

小川　悟

文学論集の八十周年記念特輯号に、私は文芸作品の普遍性を証しすることに、文学研究の一つの目的があるとし、比較文学の将来に対する方向づけのためのイデーについて述べた。作品の普遍性を証しすることに、文学研究の一つの目的があるということは、これを何人も否定できないと思うのであるが、その具体的な方法に関しては多くの論議がなされねばなるまい。比較文学は、そのために重大な発言と、普遍性の証言のための努力を怠ることはなかったといってよい。前述の私の論文は、この点を認めつつも、比較文学の方法の拡大をシュトリッヒに即して論じたものである。しかしながら、フランスで生れた所謂比較文学研究に対して、われわれ日本の研究者は研究の最後の一点において、異邦人であることを自覚せざるを得ない。それは、日本がヨーロッパという地理的状況の中に位置していないという素朴な反省にも通じることである。一般に、比較文学の研究に際して、直接的に「比較」が具体化されるのではなく、先ず各々の外国文学の作品が当面の問題となる。いうなれば、一般的な意味での外国文学研究は比較文学のための不可欠な基礎作業であるといえよう。

従って、わが国において、いかなる意識と方法に基づく外国文学研究が望まれるかということを考える必要がある。この点に関しても、私は既に幾度か論じてきた。結論からいえば、研究の意識と方法は、わが国の文化史とのかかわり合いにおいて具体的な形式をつくり出すものでなければならない。単なる外国文学研究が、元来はある筈がないし、あるとしてもさほどの意味のあるものでもない。われわれが、ある外国文学作品をどう読み取り、どのように判断したかということがすべてであるのではない。問題は、理解や評価の結果が、われわれの文化に直接どういう関係をもたらすかというところにある。かかる目的意識によって支えられない研究は、実はその価値において認められるところは少ないであろう。研究者の主観的判断と当該作品の紹介という点では、ある種の意味があろうが、もし研究が解説ではないとするならば、かかる研究はさほどの意味を担っているとは考えられない。しかし、これらの研究を各部門各分野に整理統合して、受容の形態研究の一つとして考察する時には

それはまさに学問的作業を生み出すことになろう。われわれはこの作業によって、所謂外国文学研究者独自の意識の形態を知ることができるかも知れない。この研究者の意識形態の研究は、最終的には所謂文芸社会学の領域においてなされるべきものである。文学研究上の、一種のコスモポリティスムスがある。このコスモポリティスムスの文化史的無内容については、既に指摘したところである。われわれ研究者の立脚点は、日本という文化的基盤にあることを忘れてはなるまい。ヨーロッパ各国の文学研究においてコスモポリティスムスのあるのは、その地理的条件乃至文化史的かかわり合いにおいて当然といわねばなるまい。しかしわれわれにとっては、かかる意味でのコスモポリティスムスは直接的に作用するものではない。シュトリッヒは、ヨーロッパ文学の限界の上に、所謂世界文学が成立すると述べているが、この点われわれも理解する努力を怠ってはなるまい。

しかし、このコスモポリティスムスのイデーは、われわれにとっても先に述べた研究者の意識と方法によって具体化されることになろう。それはわれわれが従来説えられてきた比較文学の方法―ここではフランス学派のそれを意味する―を、新らしい観点から拡大することによって可能である。ルネ・ウエレックの見解によれば「バルダンスペルヂェやヴァン・ティーゲムやカレやギュイヤールの綱領的意見は、最早役に立たなくなった。彼等はむしろ、比較文学に十九世紀から受け継いだ実証主義と歴史的相対主義の重荷という古びた方法論を負わせたのである」とする。そして、反対意見を具体的に次のように述べる。「彼等は、ある作品のモティーフやテーマや、性格や状況や筋などが、既に書かれた作品の中で発見される時に生じる因果関係的説明や証明に依存する。こういう研究者達は、無数の平行線や類似性や、いやそればかりか、時には一致性すら発見した。しかし彼等は、これらの諸関係が、一人の作家がある作家を識っていたとか読んだとかいう事実を別とすれば、元来一体何を証明しているのかということを自らに問うことは極めて稀であった。芸術作品は、源泉や影響の単なる結果ではない。芸術作品は、その内部で外部からの原素材が死んでしまった素材にとどまっているような全体ではなく、この原素材が有機的に組み合さっている全体である。[1]」

作品と作品、作家と作家の比較から生じる諸関係が証明するものは何か。これらの諸関係の指摘にとどまる限りでは、最終的な目的に達し得るものでないことは明らかである。ウエレックは、「多くの文芸学者、とりわけ比較文学者の中では、根本的に文学には全く関心を持たず、公衆の意見や旅行記や民族の性格の表象や、手短かにいえば、一般的な文化史に興味を持つものがある。それによって、文芸学の概念は非常に尖鋭的に拡大され、人類の歴史と一致することになる」と、比較文学者の学問的関心の方向に批判の矢を放っている。ウエレックの比較文学に対する批判の基盤は理解できるとしても、また彼の指摘する諸関係の結果するところを比較文学が明ら

かにしなかったとしても、これらの諸関係を証明することによって文芸作品がいかなる文化的基盤に即しているかということが明らかにされるべきである。われわれの研究の最終目的は、実はこの点にあるといっても多分誤りではなかろう。敢えていうならば、文芸学の概念は一定ではなく、それは当然拡大されうるものであろう。ウエレックは、比較文学者にある種のナチオナリスムスを認めつつ「素材や方法論の領域における恣意的な限界附けや、源泉や影響の機械的な把握そしてたとえそれが高邁なものであれ、文化的民族主義への傾向は、私には比較文学の内部で長い間続いている危機の徴候であるように思われる」[2]と述べている。そして、更に「≪比較≫文学と≪一般≫文学の人工的区別は、廃止されるべきである。≪比較する≫ということは、国民文学の限界を越えるあらゆる文学研究に既に採用されている」として、比較文学の機能に意味を附与することを拒んでいる。しかしながら、われわれはこのウエレックの言葉を無条件に受け容れることはできない。ウエレックの提言は、所謂一般文芸学者としての発言とすればさほど責められるべきものではないが、比較文学者の立場からすれば、重大な批判点を含んでいることを否定することはできない。比較という行為は、文芸作品の研究にとっては自明のものである。私は、既に比較は批評行為であることを指摘した[3]。われわれの所謂文芸研究は、この比較なしには成立しない。ただ、その比較が意識的に具体化されている場合と、無意識的な場合とがあることに注意しなければならない。比較が意識的に具体化されるということは、比較文学という学的方法が具体化されることを意味する。従って、国民文学の限界を越えるあらゆる文学研究にとって、比較は当然のことであるという見解はまさに当然のことであるが、この当然さは比較文学に対する批判の当然の根拠にはなり得ないのである。むしろ、いかなる学的意識も持たない一般文学研究は成り立たないともいえる。外国文学研究ということは、無条件には成立しないといってもよかろう。先にも述べた如く、その研究がいかなる目的意識にも支えられない限りにおいてはその研究はいかなる学的価値をも担うものではない。従って、無条件に国民文学の限界を越える文学研究というものもあり得ない。

われわれがある国の文学作品を研究の対象に選ぶということは、まさに両国の文化史的接点を求めるということによって、あるいは相反点を求めるということによって有効なのである。文芸学が学的範疇に留ろうとする限りにおいて、研究者の恣意的な研究対象の選択はあってはならないといってもよかろう。「純粋の文芸学にとっては、しかし死んだファクターが問題ではなく、価値と特質が問題になる。まさにそれ故に、文芸学と批評は分たれ得ない。極めて素朴な文学史的問題ですら、評価を要求する。ラシーヌがヴォルテールに、あるいはヘルダーがゲーテに影響を及したという主張は、たとえそれが一般に一つの意味を持つとしても、これらの作家の特性に関する知識が前提となっている。即ち、彼等の担っている伝統に関する知識や、それ自体が批評であるところのたえざる測定や、比

較の分析や分類が前提となっている。いかなる文芸学も、選択の原理なしにあるいは試みを特色づけたり評価したりすることなしには書かれなかった。批評を重要でないものとして片づけてしまう文学史家達ですら、よしんば彼等が無意識的に慣習化されている尺度や判断を身につけていたとしても、不可避的に批評家である。[4]」ウエレックは、フランス学派の比較文学の実証性を、死せる事実関係を明らかにするのみであると批判し、徹底した実証性が文学研究もしは文芸作品そのものを硬直させてしまうことに警告を発している。彼のフランス学派的比較文学の方法に関する批判は、それなりに妥当であろうし、比較文学自体かかる批判を呼び出す矛盾を内に臓していることも否定できない。しかし同時に、ウエレックは、文学研究の目的をア・プリオリに自明のものとしている憾みがある。われわれは、文学研究に関して自明のものとして了解していたものを、この際根本的に考え直す必要があるように思われる。それは、たとえば、文芸作品そのものが不動の真理によって支えられているというかの如き錯覚の類である。あるいは作品の超越性に対する、盲目的な信従の類である。この超越性に対する信従が、無媒介的且つ無条件的に、国民文学の限界を越えたあらゆる文学研究というものを成り立たせているといえるが、極論すれば、かかる文学研究は学問的に無内容な仮構性によって、あたかも成り立っているかのように見えるだけのことである。

ウエレックは、評価の問題と絡んで、いかなる文芸学も選択の原理なしには成立しないという。この原理は、彼にとっていわば評価そのものであるといえる。そしてそれは誤りではない。しかしながら、評価のよってもって生じきたる基盤を問わない限り、この概念は学問的に明白なものとはならないであろう。評価の問題は、近時文芸学、とりわけドイツ文芸学においても、解決されねばならない問題として取り上げられている。評価は、勿論審美的解釈の結果として定義づけられうるものであろうが、決してその範疇内に留るものではなかろう。評価が学問的な意味で定義されるためには、それは研究の方法と不可分離であってはならないし、また方法を決定的なものにする研究者の意識との連関が問われなければならないだろう。従って、評価という批評行為は、研究者の意識と方法が生み出す研究の客観性を担っていなければならない。選択の原理は、ただに評価によってのみ決定されるものではない。超民族的という前提の下に、しかしながらこの原理は決定されるものではない。たとえば文学史の時代区分に関して、H・P・H・テッシングは、比較文学史が所謂文学史の時代の発見や確立や区分にどの程度に役立つのかという問題と、比較文学史は様式史や精神史における時代の成立や連続を明らかにしうるかどうかという問題を提起し、次のように述べている。「この問題に答えるのに、われわれは先ず一般的な超民族的時代区分に―ヨーロッパ文学史のということ―達することがわれわれの最終目的であるのかどうかということを明らかにしなければならない。…時代のかかる均統化は、確かに大きな利点を供

する。それは、単に展望と方向づけを容易ならしめるのみならず、様々な国民文学の比較を容易ならしめる。それにもかかわらず、私がためらいを感じるのは、私が均統化に共鳴しないという理由だけによるものではない。何故なら、われわれはなる程名辞の均統化には達したけれども、残念ながら内実の均統化には達していないと思われるからである。たとえば、浪漫派は、ドイツにおける場合と、フランスにおける場合と、またイギリス、オランダにおける場合と本質的に異ったものを意味していることが知られている。民族的現象としての代りに、西ヨーロッパ的な現象としての浪漫派を記述することを試みる場合には、すべての特徴的なものと具体的なものは失われるだろう。」[5]

ウエレックは、比較文学の成立要件としてのナショナリスムスを指摘したが、学問的評価の問題は、さしあたりこのナショナリスムスと触れ合うことなしには解決できないように思われる。つまり重要なことは、個々の研究者は、個々の民族に属しているという事実である。そしてそれは、個々の民族の文化的伝統が、いかに他の民族の文化的伝統と因果的に深く結びついているか、またいかに決定的に相反するものであるかという事実である。比較文学にとって、また文学史にとっても重要な作業である時代区分に関して、テッシングは ヨーロッパ文学史 という仮構性に否定的態度を示しているが、更に次のように述べている。「われわれが…ディルタイと共に、新らしい文化史的時代を引き出す世代が、具体的な歴史的、文化的、社会学的状況から生じるということを信じるなら、かかる状況は、また常に大部分が民族的に制限されたものであるということが明らかになる。新らしい文学史的世代は、具体的な民族的状況と、そして特に現存の文芸と対決しなければならない。勿論、国民文学は決して自らの中で閉塞せる全体でもないし、有機体でもない。しかし私には、国民文学はさしあたっては、相対的に閉塞された統一体として考察し、かかるものとして、精神史的乃至様式史的観点、且つまたその他の諸観点に従って独立して時代区分することが重要であるように思われる。決して他の文学との平行を気にかけない、このような個別化的で具体的な対象に相応せる処理法は、超民族的な均統化的時代区分に対していろいろの点で勝っている。」[6]

時代区分の方法の具体性は、テッシングの述べているように、先ず国民文学を相対的に閉塞された統一体として考察し、個々の研究者の諸観点に従うところにある。時代区分は、単なる通史的整理と排列ではなく、まさに文学史の一時代の歴史的必然性を作品に即して証しする作業である。従ってこの作業の前では、超民族的という概念はそのまま適用されるものではない。

時代区分の問題は、区分された時代がより具体的に明らかにされるために、比較という作業を要求する。文学研究という作業が文化史の領域の中で結果するためには、作品を文化現象として考察する必要がある。文学史的時代とは、かかるものとして考察された作品群によって構成されているものである。これらの作品を支えている

様々なモティーフや素材や様式が、いかに相通じいかに相違するかということを詳細に知る必要がある。更に、これらの作品の諸要素が、いかなる社会的基盤から生じているかということを知る必要がある。ア・プリオリに作品の存在の絶対性を認容することは、学問としての文学研究を成立せしめることはないだろう。文芸作品が本来社会的であるということは、自明の理である。社会的ということは、作品はその時代の人間意識の総体である現実を担っているものともいえよう。作品の社会性を否定する時には、実は学問としての文学研究、即ち文芸学自体否定されることになろう。社会性ということに対してためらいを持つことは、文芸学を消極的な狭隘な領域に閉じ込めてしまうことになる。文芸学を文化科学の一部門として承認することが必要である。勿論、観念的にはかかるものとして文芸学は承認されているだろう。しかし実際には、この承認は拒否されている場合が多い。たとえば、それはニュー・クリティシズム乃至インタープレタチオーンに力点をおく方法にみられる。作品を純粋に解釈し批評することに最終的に正当性を認めることで、果して文芸学を学たらしめることができるのだろうか。

ともあれある時代の文学史的区分は、比較によって具体的なものとなる。勿論、共通の文芸思潮を持つ両国の時代の骨格を、比較によって知ることができるし、また一方にあって他方にはない文芸思潮を中心に、両国の同時代を比較することもできる。たとえば前者の場合、われわれは「近代的自我の成立とその展開」というテーマの下に、日独仏国間の自然主義を起点として比較作業を行なっている。[7] われわれは、その作業に入る前に「近代的自我」というものの概念規定をなさねばならなかった。「近代的自我」とは、階級社会の発達と共に社会的に覚醒した乃至しようとする自我の意であるというテーゼを立てた。この場合、研究は当然わが国における自然主義の受容という面においてなされるのであるが、われわれはこの自然主義の受容の必然性を、作品から垂直に社会構造にみようとする。その際、作品の内実と、作品を構成している諸要素が綿密に考察されねばならない。そしてその結果が、たとえばドイツ自然主義の作品乃至その思潮を生み出した時代と比較され、近似、一致、相反の諸点が指摘される。究極的には、われわれは両国の文化史の方向とその構造の近似、一致、相反という諸点の指摘に至ろうとするのである。

文芸研究が個人的且つ主観的な範疇でなされることの当否はおくとして、比較文学と因果関係や影響の研究を、更に方法的に拡大することが今や要請されているのではなかろうか。比較文学自体、ウエレックの批判を受けねばならない本質を備えているとしても、それが比較文学の前途を閉すものでないことはいうまでもない。且つて、私は比較文学は一つの巨大な離程標を立てたと書いた。しかしそれは、比較文学にとって決して完了を意味するものではない。

「比較は、決して比較文学個有のものではないので、比較文学は比較文学と呼ばれるのではなく、むしろ世界文学と呼ばれるのがよ

かろう。いかなる文芸学も、世界文学的考察なしには生れ得ない。ある文学を、それ自体孤立的に扱うことは不可能である。[8]」シュトリッヒのこの言葉は、比較を未だ学問的次元に高めたものであるとはいえない。イデーは理解できるとしても、彼とは逆に、比較文学個有のものである比較があるべきである。それは方法として成り立つところの比較のことである。比較が学問の方法として確立される時に、われわれは真の意味での世界文学的考察に達することができよう。勿論、いかなる文学研究といえども、比較なしにはあり得ないが、方法として意識化されたものであるかどうかということが問題である。シュトリッヒが世界文学と呼ぶ文芸学は、作品の普遍性の証明に従事する。しかし、世界文学も作品の普遍性も無条件且つ直接的には証しされ難い。また比較文学と一般文芸学の区別を除去することが、その儘世界文学を確立することの可能性を意味するものでもなければ、文学研究を真に学問的作業として確立するものでもない。文芸作品の存在は、自明の理であるか。もし自明の理の中で問題が処理されうるのであるならば、多分文芸学という学問は自らの存在証明を抛棄することになるだろう。

※この稿は、文学論集八十周年記念特集号の拙論「比較の意味」の続稿である。

— Anmerkungen —

① R. Wellek, Grundbegriffe der Literaturkritik 1965, S. 202
② R. Wellek, ibid., S. 206
③ 関西大学文学論集八十周年記念特集号「比較の意味」参照
④ R. Wellek, ibid., S. 207
⑤ H. P. H. Tessing, Die Bedeutung der vergleichenden Literaturgeschichte für die literarische Periodisierung (i. Forschungsprobleme der vergleichenden Literaturgeschichte) 1950, S. 14
⑥ H. P. H. Tessing, ibid., S. 15
⑦ 関西大学独逸文学会編「独逸文学」内山貞三郎教授 古稀記念号所載の "Entstehung u. Entwiklung des modernen Ich" 参照
⑧ F. Strich, Goethe und die Weltliteratur 19 , S. 23